

# 日本の情報システム学研究

—学会誌の参照分析—

佐 藤 修

## 要 旨

日本で情報システム学 (Information Systems) を研究する主な学会には、日本情報経営学会、経営情報学会、更に新しい情報システム学会がある。特に前 2 者は会員の重複も多く研究内容が似ている。しかし詳細に観察すると論文の掲載方針や掲載論文の性格など、それぞれ特色がある。本稿では両学会の最近の学会誌及びその掲載論文を、世界の代表的な情報システム学雑誌である Journal of Association for Information Systems を基準に参照分析の方法で定量的に比較することにより、両学会誌の特色を考察する。本稿の結果は日本の情報システム学研究者が研究成果を発表しようとする時、発表先選定において参考として利用できる。

## Abstract

There are some academic journals to publish Japanese academic research papers of Information Systems. Among them, Journal of Information and Management issued by Japan Society for Information and Management (JSIM), and Japan Society for Management Information Journal that was issued by the Japan Society for Management Information (JASMIN) are main outlets. They are similar in terms of research area and the membership overlap to a large extent. But there are some differences between the two. A citation analysis is conducted quantitatively to find the difference. Journal of Association for Information Systems that is issued by AIS is employed as the measurement anchor.

キーワード：学会誌、日本情報経営学会、経営情報学会、情報システム学会、参照分析

Keywords : academic journals, JSIM, JASMIN, ISSJ, citation analysis

## 1. IS 学の諸学会

多くの研究分野がそうであるように、情報システム学 (Discipline of Information Sys-

tems: IS 学) という学問領域についても様々な解釈がある。Hirscheim (2003) によれば、最も基本的な定義と思しきものは Keen (1987) の「IS 研究の使命は、組織や社会における情報技術の効果的設計、提供、利用、そ

してその影響の研究」である。また Lee (2001) は「技術システムと社会システムが相互作用した時に現れる現象の研究」と定義している。これらを情報システム学の定義とするならば、日本でこれに近い研究目的を持つ学会としては、日本情報経営学会 (JSIM), 経営情報学会 (JASMIN), そして情報システム学会 (ISSJ) がある。

これらの学会の主旨や目的により上記を確認しよう。JSIM のビジョン (2007) には「情報システムにかかわる理論と実践、研究と実務、基礎と応用、技術と人間などの有機的相互関係が学際的に展開される」とある。JASMIN の目的 (2008) には「経営情報にかかわる諸問題の研究および応用」とある。そして ISSJ の目的 (2008) も「人間中心の情報システムを志向し、ビジネス・研究領域の融合や情報システム人材の育成」とある。何れにも、キーワードである情報システムあるいは経営情報が含まれている。以上から目的は重複していると理解できるが、同時に微妙な違いがあることも感じられる。

JSIM は、1979 年秋に設立されたオフィス・オートメーション学会 (Japan Study Society for Office Automation: JSSOA) 時代を含めると歴史が 30 年以上あり、最も長い。JASMIN は 1992 年 4 月 1 日の設立で、JSIM ほど歴史は長くないが、会員数で最大規模である。ISSJ は急速に拡大しつつあるが、平成 17 年 4 月 23 日設立でまだ設立後 6 年と歴史が浅い。他方、世界最大の情報システム学会は AIS (Association for Information Systems) であり、我が国にもその支部 (chapter) として JPAIS (Japan AIS) がある。しかし

日本の支部はまだ規模が小さい。

これらの学会は情報システム学またはその古い名前である経営情報学や経営情報システム学を中心テーマに掲げている。情報システム研究者はこの何れかの学会誌に研究成果を発表すると共に、これらの学会誌が掲載する研究論文を参照する。JSIM, JASMIN, ISSJ は学会誌を刊行している。JSIM は日本情報経営学会誌 (Journal of Information and Management: JIM) を、JASMIN も経営情報学会誌 (Journal of the Japan Society for Management Information JJASMIN)，そして ISSJ も情報システム学会誌 (Journal of Information System Society of Japan: JISSJ) を定期刊行している。JIM と JJASMIN は季刊である。しかし ISSJ は歴史が浅く、規模が小さいこともあります、季刊には至らず、既発表論文数もまだ少ない。論文は 2006 年に 1 本、2007 年 0 本、そして 2008 年に 7 本、2009 年と 2010 年<sup>1)</sup>にそれぞれ 2 本という程度である。

類似の学会が複数あれば研究成果を発表する発表先が複数あることになるので、発表機会は豊富になる。しかし IS 学研究者はその研究論文をどこに投稿するかで迷う。JSIM と ISSJ は投稿者を会員に限定しているのに對して、JASMIN は誰でも投稿できる。

国際的な IS 学の中心学会は AIS (Association for Information Systems) である。その他にも Information Resource Management Association (IRMA) 等、多少の学会はある。しかし AIS は規模が抜群に大きく、多数の学会を吸収してさらに拡大しつつある。例えば 1986 年に設立された IAIM (International

Academy for Information Management) は、2002 年 12 月に AIS の教育研究部門 (Special Interest Group of Education: SIG-ED) になった (IAIM,2008)。AIS は Journal of Association for Information Systems (JAIS) という論文誌と Communication of Association for Information Systems (CAIS) というコミュニケーション誌をウェブにて毎月刊行している。

投稿先選定要素の一つはその学会及び学会誌の性格である。日本の上記 3 学会は何れも情報システム関連の論文を受け付けており、学会の目的も重複している。しかし学会及び学会誌の性格は微妙に異なる。3 学会を知る研究者は筆者に、JSIM は組織科学 (Organization Sciences: OS) 指向で JASMIN は経営科学 (Management Sciences: MS) 指向であり、ISSJ はコンピュータ科学 (Computer Sciences: CS) 指向であると言う。情報システム学がこれらの融合領域である (Culnan & Swanson, 1986) ことを考えると、歴史的経過や会員構成の違いなどでこれらの何れかに偏ることは容易に考えられる。そうであるならば投稿論文の性格によって、例えそれが経営・組織科学的であれば JIM に、経営工学的であれば JJASMIN に、コンピュータ科学的であれば JISSJ に投稿する、ということになるであろう。しかし本当にそうであるのかどうかについては、まだ確認されていない。先に紹介したある研究者の評価は彼の主観的評価であり、これには具体的な裏付けはない。

## 2. 研究仮説

本稿は上記の問題意識に基づき、各学会誌の性格を統計的参照分析 (statistical citation analysis) の方法により確認することを目的にする。但し、ISSJ は前記のように刊行数も既発表論文数も少ないので、統計的に論ずることはできない。故に、ISSJ を外し、JIM と JJASMIN の 2 学会誌について統計的参照分析を行う。

AIS, JSIM, JASMIN は何れも情報システムを研究する学会なので、掲載論文の参照先は似てくる。当然正の相関があると思われる。故に仮説 1 (H1) は次のようになる。

H1: JAIS, JIM, JJASMIN の参照学術誌別の参照数には相関がある。

JIM も JJASMIN も季刊誌で年 4 号発行されるが、論文 1 本当たりの紙幅制約は JIM のほうが厳しく、刷り上がりで上限 10 頁に限定されている<sup>2)</sup>。これに対して JJASMIN は紙幅制限が緩く、和文原稿で 15 頁程度となっている。このため、論文 1 本当たり平均頁数は JJASMIN のほうが多く、1 号当たりの平均掲載論文数は JIM のほうが多い。参照文献数は論文 1 本当たりの平均頁数に比例すると考えられるので、論文 1 本当たりで見ると JJASMIN のほうが多いが、掲載論文数は JIM のほうが多いので、1 号当たりで見るとほぼ同じ程度になると思われる。

JIM では査読済論文の他、査読なし論文も掲載されるのに対して、JJASMIN は査読済論文と査読済研究ノートだけである。査読なし論文よりも査読済論文のほうが文献参照も

慎重に行われていると推定される。以上から、論文1本当たりの参照文献数について次の仮説2が導出できる。

H2: JJASMINはJIMよりも論文1本当たりの参照文献数が多い。

前章で紹介したように、JSIMは組織科学指向でJASMINは経営工学指向であり、ISSJはコンピュータ科学指向であるとする意見がある。これを第3仮説とする。

H3: JIMは組織科学の参照文献が多く、JJASMINは経営工学の参照文献が多い。AISはどちらの性格が強いかは不明である。しかし本研究ではJAISをIS学研究誌の基準としているので、本稿ではこれが基準と考える。

### 3. 過去の研究

統計的参考分析(statistical citation analysis)の方法は海外の情報システム研究では決して珍しい方法ではない。Culnan & Swanson(1986)はMIS分野の271論文の参考分析を実施し、MISがOS, MS, CSの3関連分野よりもまだ独立性が低いことを実証している。

Wade(2006)等は参考分析を使い、IS学は潜在的にはその可能性があるが、現状ではまだ独立の学問領域とはなっていないことを示している。彼らの研究によると、現在はまだ経営学の一分野と認識できる状況である。

しかし同時に発表されたGrover等(2006)の研究では、やはり参考分析の方法を使って、IS学が独立の学問分野として自立しつつあり、関連学問5分野(OS, MS, CS, マーケ

ティング、経済学)のうち、OS, MS, CSに對してIS学は顕著な貢献を始めていると主張している。

他方日本では、情報システム分野における参考分析による研究は、筆者の知る限り例が見られない。上記2学会誌についての統計的参考分析は、筆者の知る限り過去に例がない。

### 4. 研究方法

JAISは既に12巻となった。IS学の世界最大学会の月刊誌ということで、既発表論文数も多い。筆者の時間制約から全ての巻を参考することはできなかったので、今回の研究では9巻の1~4号を採用した。情報システムのように技術進歩の早い分野では、時間の経過による研究テーマや参考先の変化が早いと思われる。そこでそれ以前のものを参考にしなかったという意味もある。数えると9巻の1~4号まで論文12本になる。これらの参考文献から学術雑誌に限って数え上げた。JAISは全て査読済論文で、情報システム分野では最も権威ある論文誌である。このため、文献参考も慎重に行われており、論文1本当たり平均参考文献数は多い。

対応する日本情報経営学会誌(JSIM)及び経営情報学会誌(JJASMIN)についても、ほぼ比肩し得る英文参考数を得るという基準で直近の刊行巻を選定した。何れも和文論文誌なので和文参考文献が多い。しかし本稿ではJAISとの比較が研究目的なので、和文参考文献は除外した。前者については3年分の26~28号、後者についても同様に3年分の14~16号を採用した。但し日本情報経営学

会誌の26巻4号は手元にないので除外した。これらについても参照されている英文学術雑誌のみを数え上げた。数え上げた論文数は日本情報経営学会誌で121論文、経営情報学会誌で58論文である。但し編集者の巻頭言にも英文学術雑誌の参照がある。これらは2頁程度であるが1本の論文として数え、その参考文献を参照文献数に加算している。また、研究ノートも同様に扱っている。

上記のデータによると、JAISは月刊であるが1号当たりの掲載数が平均3本と少ない。日本の2誌は季刊であるが、JIMでは論文当たりの紙幅が少なく1号あたり平均11.3本の論文が掲載される。これに対してJJASMINも季刊であるが、論文当たりの紙幅は多く、1号あたりの論文数は平均4.8本と少ない。

上記3誌に掲載された論文が参照する英文学術誌の参照論文数を数え上げ、これについて統計的分析を行った。総じてJIMでは論文1本の紙幅が薄い分だけ参照英文学術雑誌論文数は少なく、JJASMINは論文1本が厚い分だけ参照英文学術雑誌論文数が多い。しかしJIMでは掲載論文数でカバーして、1号当たりの参照論文数は、表1のようにむしろ多くなっている。

## 5. データ分析

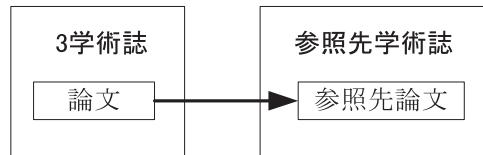
上記の方法で数え上げた参照論文数は243種類、JAISで延べ395本、JIMで219本、JJASMINで314本であった(表1)。

本稿で研究対象とする3学術誌が掲載する各論文は、多数の学術誌の多数の論文を参照

表1 分析データの概要

学会誌	巻	号	論文数	参照文献数
JAIS	1	4	12	395
JIM	3	11	121	314
JJASMIN	3	12	58	219

図1 学術誌の参照関係



している。この関係を図示すると図1のようになる。

図1で左側の論文1本当たりの参照数平均と標準偏差は表2のようになる。これで見ると、JAIS, JIM, JJASMINそれぞれ32.9, 2.56, 4.17である。JAISは英文誌なのでやはり多い。表2のように、JIMとJJASMINでは平均参照文献数が見かけ上異なる。この差が有意であるかどうかを検証するために、まず等分散性検定(F検定)を行うと標準偏差は有意に異なる( $F = 1.40, p = 0.0038$ )。故にこれを前提とする平均値の差の検定を行うと、両者の参照数の差は有意であった( $t = 2.13, p = 0.018$ )。これから、仮説2(H2)は裏付けられ、JJASMINのほうがJIMよりも参照文献数は多いことが分かった。

Culnan & Swanson(1986)の研究結果では、論文1本当たりの参照論文数は平均27.9本、標準偏差19.1本であった。本稿のJAISでは論文1本当たりの参照文献数の平均は32.9本で、標準偏差が23.5本(表2)になった。平均5本増えている。等分散性検定では $F =$

表2 論文当たりの参照文献数

	JAIS	JJASMIN	JIM
平均値	32.9	4.17	2.56
標準偏差	23.5	5.14	3.84

1.5138 となり有意水準 1% で等分散と言えない。よって Welch の検定を行うと、Culnan & Swanson (1986) の結果と本稿の JAIS の結果では参照文献数の平均値の差は有意である ( $t = 3.02, p = 0.001$ )。情報化の進展により、参照文献数は今日では当時 (1980 年-1984 年) よりも多くなっていると言える。

前記の 3 学術誌の参考文献別件数の Pearson 相関、すなわち図 1 で右側の相関を取ると表 3 のようになった。相関係数は全て正で  $p = 0.000$  で有意である。故に仮説 1 (H1) が採択される。すなわち JAIS, JIM, JJASMIN の参照雑誌別の参照数には有意 (全て  $p = 0.000$ ) な相関がある。つまり何れも同じ学術誌を参照する傾向がある。同じ分野の学術誌なので、当然予想される結果である。3 つの学術誌は全て同じ分野の学術誌であることが統計的にも確認された。

JAIS とその他 2 学術誌の相関係数が 0.2992 と 0.3171 というように近いことから、JIM も JJASMIN も、JAIS との参照先類似性の程度はほぼ同じであることが分かる。また、JASMIN と JSIM との相関係数が 0.4561 と大きいので、日本の研究者には欧米の研究者と異なる参照先の偏りがあることが分かる。つまり日本の IS 学者が参照するものは、海外の AIS の学者が参照するものと多少違っていると推定される。JAIS が世界全体の平均であることを考えれば、これに比べて

表3 3 変数の Pearson 相関係数

	JAIS	JJASMIN	JIM
JJASMIN	0.2992	1	
JIM	0.3171	0.4561	1

日本の学者の参照先が多少偏っていることは、当然予想されることである。

JAIS に投稿する研究者が参照する学術誌の上位 14 誌は降順に表 4 である。最も多いのは IS 分野の老舗である MIS Quarterly で、2 位以下を大きく引き離している。2 位が Management Science, 3 位が Information Systems Research, 4 位が Journal of Management Information Systems であった。そして 5 位に Communications of the ACM が入っている。表 4 にあるのは何れも代表的な IS 学術誌である。

同表では JIM と JJASMIN の参照数も掲載している。Grover 等 (2006) は MIS Quarterly, Information Systems Research, Journal of Management Information Systems が IS 分野におけるトップ 3 学術誌であると述べている。しかし JIM で Information Systems Research の、JJASMIN で Information Systems Research と Journal of Management Information Systems の参照数が少ないのが特徴的である。

同様に、今度は JJASMIN の主要参照学術誌を降順に並べると、上位 14 誌は表 5 のようになる。同表では JAIS と JIM の参照数も掲載している。表 4 と比べると、Harvard Business Review, Organizational Behavior and Human Decision Processes や European Journal of Operational Research の参照が多

表4 JAISで参照される学術雑誌

学術雑誌	JAIS	JJASMIN	JIM
MIS Quarterly	62	2	13
Management Science	28	10	6
Information Systems Research	26	5	5
Journal of Management Information Systems	18	5	11
Communications of the ACM	15	9	19
Journal of the Association for Information Systems	13	0	0
Decision Support Systems	12	1	0
Academy of Management Review	8	2	4
Administrative Science Quarterly	8	2	5
Organization Science	7	2	16
Econometrica	7	1	0
Information Technology and People	7	0	0
European Journal of Information Systems	6	0	2
Harvard Business Review	5	16	19

表5 JASMINで参照される学術雑誌

学術雑誌	JAIS	JJASMIN	JIM
Harvard Business Review	5	16	19
Organizational Behavior and Human Decision Processes	0	11	0
Management Science	28	10	6
Communications of the ACM	15	9	19
European Journal of Operational Research	0	7	1
Sloan Management Review	4	6	9
Information Systems Research	26	5	5
Journal of Management Information Systems	18	5	11
Strategic Management Journal	3	5	55
International Journal of Production Research	1	5	2
Quarterly Journal of Economics	0	5	1
Journal of Personality and Social Psychology	6	4	0
International Journal of Production Economics	0	4	4
Journal of Business Venturing	0	4	0

いこと、より広い学術分野の学術誌、例えば経済学のQuarterly Journal of Economicsや生産管理分野のInternational Journal of Production Economicsが入っていることが

特徴的である。JJASMINはMS指向という意見があることを前記したが、表5の結果を見ると、組織論分野その他の関連学術分野の学術誌もあり、参照先にはもっと広がりがあ

表6 JIMで参照される学術雑誌

学術雑誌	JAIS	JASMIN	JSIM
Strategic Management Journal	3	5	55
Harvard Business Review	5	16	19
Communications of the ACM	15	9	19
Organization Science	7	2	16
MIS Quarterly	62	2	13
Journal of Management Information Systems	18	5	11
Sloan Management Review	4	6	9
Journal of Marketing	1	1	9
Information & Management	1	1	7
Management Science	28	10	6
Information Systems Research	26	5	5
Administrative Science Quarterly	8	2	5
Journal of Marketing Research	0	2	5
International Journal of Production Economics	0	4	4

るよう見える。

今度は JIM で参照される学術雑誌を降順にリストすると上位 14 誌は表 6 のようになる。Strategic Management Journal の参照数が非常に多く、Harvard Business Review と Communications of the ACM が同数の 2 位になっている。Organization Science も 4 位で参照が多い。JIM は組織や経営戦略への指向が強いと推測できる。また、トップ 14 雜誌のうちにマーケティングの学術誌が 2 つ、すなわち Journal of Marketing と Journal of Marketing Research が入っているのが特徴的である。同表では JAIS と JJASMIN の参照数も掲載している。

前記の仮説 3 は、JIM は OS 指向的であり、JJASMIN は MS 指向的であるという仮説であった。以上の結果から前半についてはその通りと推測できそうである。しかし後半については、そう断定できないように思える。表

5 のうち、明らかに MS 指向と言えるのは European Journal of Operational Research 程度である。

仮説 3 を更に統計的に検証するためには、表 4 から表 6 に含まれている各学術誌がどの分野であるかを明示しなければならない。Grover 等 (2006) は各分野の代表的学術誌を表 7 のように分類している。しかし表 4 から表 6 にはこれ以外の学術誌も含まれている。これらに含まれていて表 7 に含まれていない学術誌の中には、分類が難しく評価の分かれそうなものもある。故に、仮説 3 については上記の部分的な結論に止めたい。

## 6. まとめ

本稿では、日本における IS 学分野の学会として JSIM, JASMIN, ISSJ の 3 学会を認識した。これらのうち、前 2 者の学術誌 JIM

表 7 関連学問分野の代表的学術誌

学問分野	代表的学術誌
OS	Academy of Management Journal Academy of Management Review Administrative Science Quarterly Harvard Business Review Organization Science Sloan Management Review
MS	Management Science Decision Science Interfaces
CS	Communications of the ACM ACM Computing Survey ACM Transactions on Database systems IBM Systems Journal

と JJASMIN に掲載された最近の論文について参照分析を実施した。また IS 学分野の主要国際学会である AIS のウェブ学術誌 JAIS についても同様の分析を行い、これを基準として JIM と JJASMIN に掲載される論文の参照先を評価した。

本研究ではまず、JAIS を IS 学分野の基準とした場合、JIM と JJASMIN の掲載論文の参照文献が JAIS 掲載論文の参照文献と有意な正の相関を持つことを明らかにし、何れも IS 学分野の学術誌と考えられると述べた（仮説 1）。しかし同時に、日本の上記 2 学術誌には JAIS とは異なる参照傾向もあることが、同時に認められた。

次に、JIM と JJASMIN を比較した時、JJASMIN のほうが JIM よりも参照文献数が多いことを明らかにした（仮説 2）。これには 2 つ理由があることを示した。第一に、JIM は JJASMIN よりも紙幅制約が厳しく、論文当たりの紙幅が JJASMIN よりも有意に小さ

いからである。第二の理由は、JJASMIN では全て査読済の論文または研究ノートにあるのに対して、JIM では招待論文や査読なし論文が含まれているためである。

総じて査読なし論文よりも査読済論文の方が品質は高い。JJASMIN のように全て査読済であれば、学術誌としての品質も向上し、学界における評価・信用も高まると思われる。しかし招待論文や査読なし論文にもそれなりの意味がある。投稿はないけれど重要なテーマや、ある分野についての論文を学会誌に掲載し会員を啓発したい場合には、招待論文も必要かもしれない。また、投稿者が何らかの理由で研究成果を早く公開したいという場合には、査読を経ていると刊行までに時間がかかるので、査読なしでというニーズもあるかもしれません。故にどちらのポリシーが良いとは概に言えない。それぞれ一長一短であろう。

JSIM, JASMIN, ISSJ の各学会がそれぞ

OS, MS, CS 指向的であるという意見がある。本稿では仮説 3 として、これらのうち前 2 者について、各刊行学術誌すなわち JIM と JJASMIN の掲載論文の参照分析結果を行い、果たしてそう言えそうかどうかを検討した。表 4 から表 6 の検討から、JSIM については確かにその傾向がありそうな結果となつたが、JASMIN についてはもっと広がりがありそうな印象を得た。

Culnan & Swanson (1986) も述べるように、学会誌に掲載される論文が特定の分野に偏っているのは、その学会の特徴とその学術分野の独自性 (identity) を示す上で意味のあることであろう。他方、掲載する論文に広がりがあるということは、学会の多様性を示していると共に、将来の学術分野の広がり期待や、研究の学際的発展には望ましいかもしれない。JJASMIN の場合には、投稿者が JASMIN 会員に限定されない。このため、会員の多様性以上に JJASMIN には多様性が出てくる。この点も上記の結果に影響しているかもしれない。

本研究の成果は、日本の IS 学研究者が研究成果を発表しようとする時に、どの学会誌に投稿するかを判断する場合の参考資料となる。前記のように日本では IS 学の学術誌は 3 つある。どれに投稿するかは、学会誌の評判や採択可能性 (投稿資格や採択率)、投稿者の事情の他に、その学会誌の性格による。総じて自分の研究に近い論文が多数採択されている学会誌であれば、自分の投稿論文がより良く評価される可能性が高い。また、採択されて掲載された場合に、読者に読まれ高い評価を得て参照される可能性が高い。故に、最

適な発表先の選択は重要である。

更に本研究の成果は、IS 研究者が日本の学術誌から必要な文献を探す場合、どの分野の研究であればどの学術誌から探すべきかを判断する場合の指針にもなる。今回は JIM についてのみ特徴が見えたが、後述するようにより厳密な研究を行えば、その他の学術誌についても傾向を見ることができるかもしれない。

## 7. 研究の限界と今後の研究方向

本稿には以下の限界がある。第一に、本稿では JSIM や JASMIN は IS 学の学会であるという前提の基に議論を進めた。筆者はこの根拠を各学会が公開している学会の目的に求めた。しかし両学会の会員全てがそう理解しているとは限らない。そうは思っていない会員も、何れにおいても少なからずいるであろう。学会の目的をどのように解釈するかは解釈の問題であり、字句解釈のウェイトの置き方の違いによって、異なる解釈が当然あり得る。

第二に、IS 学とは何かについて本稿では明言していない。ただ単に、AIS が IS 学の世界最大の学会であることを根拠に、その基幹学会誌 JAIS 掲載論文を IS 学研究論文の基準として利用した。IS 学の定義については様々な意見がある (Avison & Elliot, 2006; 小幡, 2006)。またそれは情報技術や社会環境の進化に伴い、歴史的にも変化している (Avison & Elliot, 2006; Culnan & Swanson, 1986)。これについての検討は別の研究機会に譲りたい。

第三に、採用した論文数は決して十分とは言えない。本研究では表1に示した範囲の論文しか分析に使っていない。厳密な結論を出すためにはもっと多くの論文を含めるべきである。仮説3でJIMとJJASMINの特徴を抽出するためには、十分な数ではない。しかし筆者の時間制約により、今回は表1の範囲にデータ収集を止めて分析した。次の機会にはより多くの論文からデータを集めて検証したい。

第四に、日本でのIS学の学会として3つを抽出したが、ISSJを検証から外した。JISSJで公開された論文がまだ少ないことが理由である。この結果、本稿で提示した仮説3をISSJについては検証できなかった。JISSJで十分な数の論文が集まつたら、同様の分析を再度実施してみたい。

第五に、本研究のアプローチで仮説3にある各学会の指向性を検証するためには、参考文献の指向性を明別しなければならない。これを実施する上でCulnan & Swanson(1986)の方法が参考になる。しかし筆者の時間的制約と、Culnan & Swanson(1986)には具体的な各学術誌の区別についての情報掲載がなかったことのために、今回はそこまでできなかった。機会を見て分析方法を研究し、日本についても比較可能な研究をしてみたい。

### 謝辞

本研究は東京経済大学からの研究助成(09-13)の成果であり、助成に感謝する。

### 注

1) 2011年2月現在

2) 投稿規程には「学会誌掲載頁数で6~10頁を標準の長さとする」と記載されている。

### 参考文献

- 小幡孝一郎(2006)「IS研究のコア特性を巡る議論(その1)」、『情報システム学会誌』Vol.1, No. 1, pp. 18-23, [http://www.yy.ics.keio.ac.jp/issj/Vol1\\_No1/A3.pdf](http://www.yy.ics.keio.ac.jp/issj/Vol1_No1/A3.pdf). (2008年7月15日)
- 経営情報学会(2008)「経営情報学会の目的」(<http://www.jasmin.jp/summary/about/index.html>) (2008年7月14日)
- 情報システム学会(2008)「情報システム学会」(<http://issj.nuis.jp/issj/object.html>) (2008年7月14日)
- 日本情報経営学会(2007)「学会のビジョン」(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/oa/about/vision.html>), (2008年7月14日)
- Avison, D. & S. Elliot (2006) "Scoping the Discipline of Information Systems," in King, J. L. & K. Lyytinen, (Eds.) *Information Systems: The State of the Field*, John Wiley & Sons Ltd., pp.3-18.
- Culnan, M.J. and E.B. Swanson (1986) "Research in Management Information Systems, 1980-1984: Points of Work and References," *MIS Quarterly*, vol.10, no.3, pp.288-302.
- Grover, V., et. al. (2006) "A Citation Analysis of the Evolution and State of Information Systems within a Constellation of Reference Discipline," *Journal of the Association for Information Systems*, May, vol.7 no.5, pp.270-325.
- Hirschheim, Rudy (2003) "Crisis in the IS Field? A Critical Reflection on the State of the Discipline," *Journal of the Association for Information Systems*, Vol.4, No.5, pp.237-293.
- IAIM (2008) "AIS SIG-ED: IAIM International Academy for Information Management," (<http://www.iaim.org/>), (2008年7月14日)
- Keen, P. (1987) "MIS Research: Current Status, Trends, and Needs," In Buckingham, R.,

- Hirschheim, R., Land F. and Tully, C. (Eds.)  
*Information Systems Education: Recommendations and Implementation*, Cambridge University Press, Cambridge, pp.1-13.
- Lee, Allen. S. (2001) "Editorial," *MIS Quarterly*, vol. 25, no.1, pp.iii-vii.
- Wade, M., M. Biehl, & H. Kim (2006) "Information

Systems is Not a Reference Discipline (And What We Can Do About It)," *Journal of Association for Information Systems*, May, Vol.7, No.5 pp.247-269.

——2011年6月7日受領——